
八カモリと方舟と魔法のホシ (22番目の八カモリの唄 改題)

ぐるぐる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

八カモリと方舟と魔法のホシ (22番目の八カモリの唄 改題)

【Nコード】

N6905X

【作者名】

ぐるぐる

【あらすじ】

移民計画「セカンド・ノア」により、新天地を目指した地球（日本）人たちの末裔八カモリ。800年の時を経て、たどり着いたフロンティアは、なんと剣と魔法の世界だった。謎の隕石、魔法の存在、天使のおとぎ話。

未知の惑星に不時着した主人公ソラと仲間たちを待ち受けるものの正体とは？

創世記

「また、はずれか……いつまで続くんだろうな。こんな生活」

「仕方ないね。確かに今回の調査の予測は高かったけど、高い高いといつてもたかだか0.34%だからね」

「そりゃーわかってるけどなー」

800年の年月をかけても、まだ至ることのない新天地。普通に考えれば、俺たちが一生掛けてもたどり着けるといふ保障はどこにもない。それでも、わずかな希望に願いを託す。そうでもしないとやってられないのだ。

未練がましく船外モニターを睨みつける。モニターに映し出される星々は、もちろんまたたかない。大気による光の屈折がない宇宙空間においては当たり前のことだが、そんな見飽きた光景は俺に溜息をつかせる理由としては十分だった。

人類が地球を失って800年。

しかし、人類の旅はまだ終わりそうになかった。

幼い兄弟がお菓子を取り合って、地面に落としてしまった。

そんな様子を見た母親は「最初から仲良く半分こにしておけばよかったに」と息子たちを諭す。

子どもだってわかる理屈だ。でもお菓子は返ってこない。

「戦争」というものは、生産性の低い時代において、自らの首を絞める行為に他ならなかった。軍事というものは底なしの胃袋を持った金食い虫であり、その維持だけで莫大なお金が使われる。万が一、消費されてしまえば、その額は一気に跳ね上がる。多くの命が奪われる。

誰だつてわかる理屈だ。でも人類は学ばなかった。

3度の世界大戦、そして、2度の太陽系間戦争を経て、地球には人が住めなくなったのだ。

人類を滅亡の危機に陥れた戦争だが、皮肉なことにも、人類を滅亡から救ったのもまた戦争によつてもたらされたものだった。戦争による人口の減少、そして科学技術の発達が人類の宇宙移民を可能にした。

「セカンド・ノア」

そう名づけられた移民計画は、地球の最後をカウントダウンするかのよう^に急ピッチで進められた。戦火を潜り抜け、生き残っていた人類はおよそ1億。当初の計画によればその全員が移民するはずだった。

しかし、目的地が決まっているわけでもなく、いつ終わるとも知れない旅である。年老いた人、戦争で大きな傷を負った人をはじめ、地球と命運を共にすることを選択する人も少なくはなかった。

そのことに拍車をかけたのは移民船（通称 ^{ハコブネ} 方舟）自体の問題であった。いくら技術が発達したとはいえ、宇宙空間で多くの人が生

活するというのは現実的ではない。よって、方舟内は船を動かすための必要最低限の人間を除いて、コールドスリープを強制されることになったからだ。

かといって、コールドスリープされなかった人が幸運だったかといえは、そうとはいえないだろう。彼らは、新天地の大地をみることなく、その生涯を宇宙空間で終えることとなったのだから。そしてその仕事は、宇宙空間で生まれた彼らの子、孫へと引き継がれていく。

最後の方舟、第25開拓移民船団が地球を発ってから800年、200万人のコールドスリーパーを新天地に導くため、方舟を動かす子孫たち。

彼らは、皮肉をこめて、自らを「ハカモリ」と呼んだ。

創世記(後書き)

11/11/8 少しだけ修正しました。

星間飛行……中

ホシミ^俺 ソラは、朝が弱い。

もちろん宇宙空間において、本当の意味での朝というものが存在するわけではない。一応、艦内照明の調整による明るさの違いはあるが、艦内における朝時間、夜時間はあくまで疑似的なものにすぎない。

何世代にも渡って宇宙空間を漂う俺たちが、今となっては特に意味をなさない24時間＝1日という地球の単位を継続して使い続けるのは、何も懐古的な理由ではない。地球で育まれた人間の体は、地球のリズムにしたがって生きていかないと、調子が狂ってしまうのだ。

地球がなくなつた今も地球に縛られているといえるだろう。

俺たちを縛るのは、地球だけではない。

俺たち、いや俺以外のハカモリたちは、病的なまでに規則正しい生活を送る者が多い。それは几帳面な俺たち^{日本人}の先祖から引き継いだ性質というより、徹底的に無駄を省き管理された生活ルールから生まれた弊害といえよう。もちろん、宇宙で生活するためには必要不可欠なルールなのだが、地球時代の人権活動家がみたら卒倒モノである。

そんな娯楽も刺激も少ない生活ではあるが、ハカモリたちの多くはそれに不満を持つことはない。艦内で生まれた彼らにとって、それは生まれたときから当たり前のことであり、どうにもならないことであることを理解しているからだ。

話を戻そう。

結局、何が言いたいかというと、俺のように朝が弱いのはハカモ

リの中では、異端者であるということだ。

「では、今日の遅刻の理由を聞こうか、ホシミくん」

異端者にとって、世間の風が冷たいのは宇宙空間でも変わらない。具体的に言うと、部長の眉間の皺の数が増え、それと比例するように俺の残業時間が延びていくのだった。

「ははは、で、新人研修こんな任務に回されたってわけかい、ソラ」

「まあな」

「いつまでも、そんな感じだと探査部を外されるも遠くないだろうね」

「うげ、それだけは勘弁してくれ」

叱る、というより半ば呆れた口調で、俺の隣、探索艇の副操縦席から俺をからかうのは、幼馴染のシド＝ライト。幼馴染といってもハカモリの同年代は皆幼馴染みたいなものだから、特別な意味はないが、俺とはそれなりに気が合う奴だ。

「大体、ライトだって、『こんな任務』に回されたんだから、俺と一緒にじゃん」

「僕はソラと違って、探査の仕事に特別な思い入れはないからね。正直なところ、仕事は何でもいいのさ。人生は1度なんだから、楽しまなくちゃ損だよ」

「ライトもつくづく変わり者だよな……ん、でも、お前って昔から探査部志望だったと思うんだが？」

方舟での仕事は、運航管理、警備探査、生産開発、環境整備と大きく4つに分かれるが、方舟の主決定機関となる運航管理部と、惑星探査の実務に関われる警備探査部は人気がある部署だ。それなりの能力と、本人の希望がなければ配属されることはまずありえない。

「ソラが希望していたからね。君が墓場勤務希望なら、僕も環境整備部を希望したと思うよ。何しろ『変わり者』のボクからみても、君は非常に興味深い」

「……お前が言うと別の意味に聞こえて怖いよ」

無駄に長いサラサラの黒髪と綺麗な顔立ち、丁寧な口調が妙な感じに似合いすぎててちょっと怖い。

ちなみに、墓場勤務とは、ワールドスリーパーの管理にあたる仕事のことだ。ハカモリの語源ともいえるその仕事は、皮肉をこめて墓場勤務と呼ばれる。めったに問題が起こることはなく、仕事自体は非常に楽であるが……そんな部署になったら、俺の心が死んでしまっただろう。

「あれにくらべりゃ、『こんな任務』のほうがまだマシだな」

「こんな任務ってなんですか！ ホシミ先輩もシド先輩も緊張感が足りないのではないですか！ ルナにとっては初めての任務なのですよ。……もうちょっと、気遣ってくれてもいいんじゃないですか」

おっと、忘れるところだった。もう一人の乗組員を紹介しよう。

後部座席から、ピーピーと可愛い声で囁いているのは、15歳3歳年下の新入班員のハクトールナ。短く二つに結んだ黒髪は頭の上でぴよこんと跳ねていてまるでウサギの耳のようだ。一応怒ってはいるのだろうが、その小動物の見た目も相まってちっとも怖くない。ただし、本来の専門は戦闘職なので怒らせすぎには要注意だ。

新入班員なのにやけに先輩に対する態度がでかいのは、こいつも幼馴染だからである。

「まあまあ、落ち着いて落ち着いて。ルナちゃんは肩に力が入りすぎているようだね」

「0・06%の任務なんて、新人研修以外のなにものでもねーだろ。テキストに子守してれば何も見つからずに終わるって」

「子守って何ですか！もしかしてルナのことを子ども扱いしてないですか？レディに対して失礼なのです！」

プンスカという擬音が見えそうな表情で顔を真っ赤にしているが、やはり怖くはない。

実はルナみたいに感情を露にするハカモリは結構珍しい。そういう意味では、ルナもある意味『変わり者』だ。本人に言ったら、さらに怒り狂いそうだから口には出さない。

それにしても、ライトはルナの肩に力が入っているとは言ったが、俺から見ればいつものルナにしか見えない。

「ルナって意外に大物なのかもしれんなー」

「ん、なんなのですか？急に褒めてもなにもあげませんよ」

「いや、ちっとも緊張した様子がないからさ」

「ふん、ホシミ先輩に褒められても嬉しくないですよーだ」

イーッって感じで、不機嫌さをアピールするルナ。が、顔が少しにやけている。わかりやすいヤツである。

「ははは、確かにいつもどおりだ。ルナちゃん良かったね」

「まあガチガチに緊張しているよりよほどマシだな」

「そういうことではないのだけどね」

「ん、どういうことだ？」

「いや、ソラって今日も遅刻してきたよね。だから、ソラがくるまで、ルナちゃんと話してたんだけど……」

「ななな、何の話をしてるのですか！ ほ、ほら先輩方、そろそろ目標宙域に着きますのですよ。さぼってないで、お仕事するのです」

「どうやら、俺には聞かせたくない何かがあったらしい。

「あとで聞かせるよ」とライトに視線を送ったが、にやりと笑って肩を竦めやがった。

まあいいさ、仕事の時間だ。

WORKING!!

俺たち警備探査部の主な仕事は、その名の通り、警備と探査である。

警備と違ってすぐに思いつくのは外部的脅威、すなわち未知なる異星人との戦闘……といたいところだが、ここ800年の方舟の歴史の中に地球外生命体との遭遇の記録は残されていない。平和なのはいいことだが、宇宙にはそうそう生命は生まれにくいことを裏付けるデータでもあり、俺たちとしては複雑な心境だ。

内部的脅威、すなわち警察機構としての働きも、いたって地味なものだ。そもそも方舟のような閉鎖的空間で犯罪を起こすような輩は非常に少ない。どこにも逃げることができないし、争いの元になるようなことも少ない。唯一例外が色恋事に関係することらしく、ここ最近の大事件は夫婦喧嘩の仲裁だったと警備班の連中がボヤいているのを聞いたことがある。

一方、探査はというと、移住可能惑星の発見、探査が目的ということになっている。要するにこの方舟の主目的を果たすべき重要な部署というわけなのだが、その成果はは推して知るべし、といったところである。なにしろ、旅が終わってないのだから。

要するに800年来の無駄飯喰らいというのが、我ら探査班の現状なのだが、その目的ゆえになくすことは不可能である。

そんな不甲斐ない現状にもかかわらず、警備探査部希望者が多いのは、未来を自らの手で切り開きたいと思っ仲間たちている八カモリ達が多いということなのだろうか。いつも無表情な八カモリをみると、

そんなに夢があるようには見えないが、意外とロマンチストな連中なのかもしれない。かくいう俺はそんな理由で探査部を目指した一人だ。

要するに、俺はロマンチストなのだ。

「今回もハズレかな。ルナちゃん、そっちはどうですか？」

「えーと、えーと、この数値が…あれ？ あれれ？」

「その数値は、第3ポッドだろ。大丈夫か、ルナ」

「大丈夫なのです。本当に大丈夫なのですよ」

2回繰り返し返したりしているのを聞くと、ちつとも大丈夫そうに聞こえないが、操作する手つきは意外と落ち着いているようだ。思ったより、うまくやっているのかもしれない。

いまやっているのは、惑星にポッドを打ち込んで大気構成などを調べる第1次調査。探査の結果は予想通りハズレのようだが、ルナの研修という意味では、それなりの成果が合ったといえそうだ。

「これはどうやら、着陸探査は無理そうだね」

まだ調査の進行具合は3割ほどだが、今回も望みが薄そうなおことが早くもハッキリしてきた。

といっても、ほとんどのケースで、第1次調査で片がつく。第2次調査、すなわち着陸探査は、その星が居住可能である可能性がある場合と、なにか有益な資源が得られそうな場合に行われることにな

るのだが、着陸探査の必要を迫られる、すなわち、結構期待できる星であるケースは非常に稀なことなのだ。

しかし、今回はルナの研修もかねているので、必要なくても可能ならば着陸探査をするつもりだったのだが、戻ってきたポッドのデータの検証の結果、どうやら、着陸すること自体が危険な星であることがわかった。もともと予測0・06%だったんだから仕方ないか。

「というわけで、お仕事ほぼ終了ですね。ルナちゃん、どうですか
初仕事のご感想は？」

「ふん、ルナにかかれば、こんなお仕事ちょよいのちょいなので
すよ」

余裕ができたことで調子をとりもどしたか、雑談をしながらでも、
操作に淀みがない。

「はじめのほうはオタオタしてたくせに」
「うるさいのです」

おっと、本格的に調子を取り戻してきたようだ。

「まあソラの発言、一見ルナちゃんをけなしているように聞こえま
すが、裏を返せば、今はしっかりしていることを認めているわけな
んですけどね」

「そうなのですか？」
「そうだよ。ソラは素直じゃないからね。古い言葉で言えば、『ツ
ンデレ』っていうのだったかな」

また妙な言葉を覚えてきたな。ライトはご先祖様の文化を調べる
のが趣味で……いや、それはどうでもいい。ツンデレの意味は俺も

知っている。

確かに素直に言わなかったのは認めるが、本人の前で言う調子に乗ってしまうから言わなかっただけで、俺は決してツンデレというわけではない。

「ツンデレってなんなのですか？」

「ああ、それはソラが、ルナちゃんと一緒に仕事ができ嬉しいけど、それを伝えるのが恥ずかしいってことだよ」

「え！　そ、そうなのですか」

「違う！　当たり前のような顔してさらっと適当なことをいうんじゃない！　だいたい、まだ仕事は終わってないぞ、二人とも気を抜きすぎだ」

「ごまかしたね」

「べつにごまかしたわけ（ピーピーピー）」

仕事中とは思えない気が抜けるような会話。そんな会話を打ち切らせたのは、突然鳴り出した電子音だった。

WARNING!?

ピーピーピー　ピーピーピー　ピーピーピー

探査艇内の緩んでいた空気を、引き締めるように突然鳴り出した電子音。

まるで目覚まし時計のアラームのようなその音は、警報にしては若干緊張感に欠ける。もちろん、俺たちに突っ込みを入れるために、警報が鳴りだしたわけではあるまい。

「いいタイミングだね」

「まったくだ」

苦笑しつつも余裕があるのは警報のレベルが、音により大体判別できるためである。

この音なら、せいぜいレベル1か2。無視しても自動操縦が自動的に対処できるレベルだ。

「ルナ、レベルいくつだ？」

「警戒レベル2なのです。小隕石群が本艇1時の方角から接近中。数は5。回避行動をとるのですか？」

「このまま自動操縦で問題ないだろうけど、観察だけはしといたほうがいいね」

「最接近予測座標（X21、Y12、Z-2）をPポイントと命名。Pポイントまで残り30秒。10秒前よりカウントを開始するですよ」

突然の事態にもすっかり反応出来ている。

ルナの専門はデータ解析というわけではないが、これくらいのこと

とであたふたするようでは、探査部に配属されることはない。

「カウント開始するです。10、9、8、7……」

「こういうカウントダウンってなんかSFぽいよね」

カウントダウンを始めるルナをみながら、ライトがちょっと場違いなというか、とぼけた感想をつぶやく。また妙な歴史資料でもみたんだろう。

「2、1、0、Pポイントを通過したです。本艇異常ありま（ガコ

ーーーーン！！）まわわわあー」

「うわ

「何だ!？」

ビーーーーービーーーーービーーーーー
ービーーーーー

探査艇全体を揺らす大きな衝撃。

続いて鳴り始めた警報音は先ほどの音とは比べ物にならない大音量で、事態の深刻さ認識させるには十分だ。目の前のモニターが赤く染まり緊急事態を告げていた。

「いたたたた、なんなのですか」

「ライト、ルナ、大丈夫か」

「僕は大丈夫だよ」

座席に固定されていたおかげで投げ出されることもなく、3人も肉体的なダメージがほとんどないのは、不幸中の幸いといえる。すぐに状況を確認すべく、ルナが端末を叩きはじめる。

「これはまずいです。右舷動力部損傷 出力20%低下。あ、左舷動力部に損傷の可能性なのです。出力35%、いや38、40、41低下が止まらないのです」

「通信はどうだ？ 方舟への連絡は」

「さつきから試してますが、エラーがでてつながりません。通信機能にも異常がでています」

「これは不味いな」

警戒レベル6つてところか。予想以上に不味い事態だ。

損傷率が50%を超えると通常航行は難しくなる。この様子だと自力での方舟への帰還はすでに難しいはずだ。

となると、方舟からの救援を待たねばならないのだが、通信機能もイカれてる。

衝突前までの報告は方舟に送られているので、救援がこないことはないだろうが、こちらの座標を正確に伝えることは出来ない。

それにしても何が起こったっていうんだ？

普通に考えれば隕石にぶつかったのだろう。だが……

「ルナちゃん、惑星の周回軌道は保てそう？」

「それは大丈夫そうなの、ってあれ？ あれれ？ あわわわわ、ひきこまれてる！？ この数値はなんなのですか？ まるで惑星重力外の力が働いているようなのです。」

「そんなわけないだろ！ 落ち着けルナ！ ライトはルナをサポートしてくれ。手動操縦に切り替えて、俺が操縦する」

オートマニュアル
自動操縦から手動操縦に切り替えると、即座に視界が探査艇外の映像に切り替わる。俺の専門は操縦だが、足元が落ち着かなくなるのでこの瞬間はちょっと苦手だ。しかし、自分自身が探査艇になつたような感覚は悪くない。手動操縦なんて教習生研修以外ではしないというハカモリもいるが、俺は自分で操縦するのは好きだ。

同僚たち
探査艇のステータスを確認。

損傷は大きいが、今の状況ならなんとか航行できる。ただ気になるのは、重力パラメータだ。ルナにああいったものの、異常な数値が確かにみられる。

おっと、ライトから通信だ。通信といっても、実際のところライトは俺の隣の席に座っている。この通信は、探査艇と感覚が一体化している俺にとっての疑似感覚的なものだ。

「ソラ、ルナちゃんの言うとおり、妙な力が働いているのは間違いなさそうだよ」

「ああ、こちらでも確認した」

「それで離脱できそうかい？」

「正直言つて難しいと思うが、どうしようもないんだ。やってみるさ」

「先輩はそれくらいしかとりえがないのだから、ルナのために頑張るのです」

「うまくいったら、ルナちゃんがキスしてくれるそうですよ」

「それは遠慮しておく」

後ろで「そんなこといってないですー」とか「失礼なのですー」とか、喚いているのがきこえる。

間違いなく俺たちは死にかけているのだろうが、こんな状況でもシリアスになりきれない。もしかすると、変わり者と呼ばれる俺た

ちでさえ、命に対する執着が薄いのかも知れない。

(こういうのもハカモリらしいのかも知れないな)

データを分析しながら、俺はそんなことを考えていた。

WARNING!?(後書き)

なかなかファンタジーに移りませんね。宇宙編をあっさり流す予定だったので、計算外でした。

君はどこに落ちたい？（前書き）

今回も短いです。

君はどこに落ちたい？

現在地惑星上空 高度80,000メートル。

本来この出力があれば離脱できるはずなのだが、探査艇の降下は止まらない。

本当に不思議な力が働いているのか、それとも計器類の故障なのかはわからないが、不味い状況であることは確かだ。ただ、出力の低下がおさまったこともあり、その降下速度は緩やかになってきている。

「さっきの衝撃の分析はどうなってる？」

「え、いまはそれどころじゃ」

「ちよつと気になることがある。調べてみてくれ」

「……わかったのです」

擬似通信機を通して、ルナに指示を飛ばす。俺の考えが正しければ……

「隕石に掠ったことは間違いなさそうですね」

「実は隕石じゃなくて、人工物であった可能性はないのか？」

「機体に残留した破片の分析結果では、99.8%の確率で自然物だと思われるのです、少なくとも人工物のような反応はないのですよ。ただ、衝突直前の軌道データはかなり不自然なので、表面だけ自然物に偽装した何者かの攻撃という可能性もあるのです。」

800年間遭遇することがなかったため考えにくいですが、この隕石が異星人による攻撃という可能性は確かにある。いや、偽装されていたということは、事故に見せかけたかったということなのだから、

そういう意味では八カモリの誰かが俺たちを狙ったと考えるべきだろうか。

自動操縦は確かに隕石を回避した。それなのに接触したのだ。という事は、「回避した後に接触した」ということだ。そこには明らかに超自然の力が働いていたと考えるべきだろう。

かといって、俺たちを狙って追尾してきたというわけではない。その証拠に、現在隕石は惑星に落下中だ。追加攻撃が掛けられる様子もないし、攻撃としてはかなり中途半端だ。これまでのデータを分析して導き出される推論は……

「あの隕石にも謎の力が働いていたっていつのかい？まあ、確かにそれで納得いくところも多いけど」

「力の正体がわかったなら、何とかするです！」

「いや、まったくわからん」

「じゃあなぜ、そんなに落ち着いてるんですか！もうだめなのですー、ルナはお星様になるのですー」

「まあ落ち着けルナ。正体はわからんが、着陸してみようと思うんだ」

「着陸は危険すぎると思うのだけど、なにか考えでもあるのかい」

「ライト、ルナ気付かないか？」

「ん、そうか！」

「え、え、なんなのですか？」

流石はライト、俺の言いたいことが一言で伝わったようだ。

さきほどから艇内の温度が上昇している。大気摩擦だ。やばいところまで落ちてきているということだが今問題なのはそこじゃない。この高度で摩擦が起こるほどの大気があるということだ。

「ポッド調査のデータと差がありすぎるね。この惑星^{ホシ}にはなにかありそうだね」

「着陸調査の必要アリ、だろ。まあ、正直このまま落ちるしかなさ
そうでもあるんだがな」

「鬼が出るか蛇が出るか、だね」

「正直碌なことはなさそうだが、まあ刺激的という意味では、こん
な任務も捨てたもんじゃないな」

「ルナは刺激なんていらなすー」

高度50,000メートル

着陸するとは決めたものの、それはそれで問題は山積みだ。

出力の低下はおさまったとはいえ、現在の出力は通常の5割をき
つているし、今までの情報を分析するに第一次調査で得た惑星デー
タもあてになるとは思えない。最悪、降りたが最後、死の惑星とい
うことも十分考えられる。それに何より問題なのは、いまだに機体
を引き寄せる力の正体が不明なことである。不幸中の幸いか、通常
着陸に必要な機能は全部生きているようだが、あくまで通常用にす
ぎない。

対大気摩擦用装甲を展開、機体の減速をはかりつつ、ポッドを打
ち出す。

目的は2つ。1つは惑星地表をあらためて走査すること。今の状
態ではあてになるとはいいがたいが、ないよりまし、まあ気休めだ。
もうひとつは、隕石群の追跡。隕石にも謎の力がかかっていたと仮
定すれば、隕石の情報を得ておくのは大切だろう。幸い一つ目の目
的はあっさり達成された。ポッドで着陸に適した地形を探すまでも
なく、赤黒い地表の広大な平野が広がっていた。

これなら着陸に問題はなさそうだ。

高度30,000メートル

隕石の地表到達を確認。こちらは十分な減速処理をしていたため、結構差がついたのだろう。

隕石が落ちた地表面をくわしく走査しようとしたところで、不意に機体にかかっていた力が消えた。突然の力の消失に、力に合わせるバランスをとっていた機体の体勢が少し崩れる。

「あわわわわ、何やってるんですかー」

「ソラ、操縦は慎重に頼むよ。お茶が零れてしまう」

「ライト、いくらなんでも余裕がありすぎだろ」

「ははは、僕はソラの操縦を信用してるからね。そんなことより、ソラ気付いたかい？」

「ああ、1箇所に落ちたな。力の消失も同時だった」

「ますますもって気になるね。僕たちも同じところを目指すかい」

「いや、まずは様子を見よう。少し離れたところに降りる」

「また二人だけの世界を作ってないで、ルナにも説明するですよ」

高度10,000メートル

力の影響をがなくなったため、とりあえず航行の問題はなくなった。後は着陸地点の決定だが……そんなことを考えていたとき、何の前触れもなく不意に視界が切り替わった。

「なっ！！！」

霧が晴れたという程度のもではなく、まさにチャンネルを切り

替えたように視覚情報が更新されたのだ。夢のような、いや夢から覚めたような不思議な感覚だった。

目の前に広がっていた赤黒い地表。それが一瞬で青と緑の大地に切り替わったのだ。

「
……」
「
……」
「
……」

異常事態にもかかわらず、俺たちは一言も言葉を発することなく、突然現れた美しい惑星^{ホシ}に見とれてしまう。

それは800年ぶりの生命のあふれる大地との再会だった。

君はどこに落ちたい？（後書き）

大気摩擦のあたりとか、適当です。

こんなのですが、ご意見、ご感想とかいただけたら、喜びます。

10/21 大幅に内容を加筆修正しました。

異世界(?) 上空いらっしやいませ

高度3、000メートル

「ここは天国なのですか？ ルナたちは死んだですか……」

「夢、ではないようだね」

「これが空……」

ようやく我に返った俺たち^{3人}だったが、何が起こったのかわからず戸惑っていた。

ただそこに広がる青い、ただひたすらに青い空。それだけが今の俺たちの現実だ。

自分の名前の意味。見ることでできなかつた空。

俺の名前には、どんな願いが込められていたのだろうか。

「地球は青かつた、とか昔の人はいったのですよね……地球もきつとこんな美しい惑星^{ホシ}だったのです」

俺たちの先祖が失った空もこんなに美しかったのだろうか。

なぜ、この美しさを手放してしまったのだろうか。

「きつとそうだろうね。だがこの言葉には続きがあつたのを知ってるかい。『だが、神はいなかった』って続くのさ。この惑星^{ホシ}はどうだろう。もしかしたら、神がいるかもね」

「せっかく見つけた惑星^{ホシ}だ。神がいるかどうかは知らないが、まだ会うわけには行かないな」

「あっ！」

突然声をあげるルナ。今度はなんだ？

「神はともかく、人はいるみたいなのです」

800年ぶりの生命あふれる大地、そこには欧州風の城と中世の町並み、そしてそれを取り巻くように大きな田畑が広がっていた。そして、もちろんその中には、人間の姿が確認されたのだ。

今回の出来事を地球の歴史で例えれば、コロンブスによるアメリカ大陸の「発見」。

もちろん「発見」とは明らかに間違ったものの見方だ。コロンブスによるアメリカ大陸への「到達」と表現すべきである。

「発見」という表現は当時のヨーロッパ中心の世界観が反映したものであり、現地の住民の存在がまるっきり無視されている。その思想が、そのあとどのような悲劇をもたらしたかについてはここでは述べまい。

昔のことよりも、問題は今である。

「やっぱり接触してみるしかないだろうな」

「そうだね。こちらから接触しなくても、向こうから接触してくるだろうけど、敵意がないことを示すためにもこちらからも接触を試みるべきだと思うよ」

現在、探査艇は街の郊外に着陸していた。そして、俺たちは機内で今後の方針を検討している。

人類が宇宙を目指した時は、当然異星人との邂逅の可能性については深く考えられていた。しかし、800年の時がその可能性を限りなく低く見積もらせ、俺たちはその対応についての知識を持ち合わせていなかった。

「でも危険なのではないですか？ ルナたち、捕まっちゃうのではないですか？」

「そうだね。危険なのは間違いないだろうね。多分捕まるだろうし「捕まるって！！」じ、じゃあ、なぜ接触するんですか！！ みんなで逃げるのですよ！」

「どこに逃げるって言うんだい？」

中世ヨーロッパ風の街並みからは想像しづらいが、彼らの科学力はこちらよりはるかに上。俺とライトはこの惑星ホシをそう分析していた。

機体を引き寄せた力、こちらの視覚データを誤魔化した力、どちらも現在の俺たちには解析不能だ。

それでなくても、こちらは3人。方舟との連絡も取れない状態なのだ。敵対しても無駄なことがわかっていいる現状、情報をおつめて交渉可能な相手かどうか見極める必要がある。

「しかし、どう考えても科学が発達した惑星ホシには見えなかったのですよ」

「僕たちの常識ではそうだけど、地球とは違った文明の発達を遂げたとは考えられないかい？」

「でも、でも、あの街には城壁があったのです。科学が発達しているとは考えにくいのですよ」

「そうだね。僕もその点に関しては、彼らの科学力に疑問を感じるよ」

「城壁があるってことは、城壁によって警戒すべき外敵が存在する

ってことだよな」

「そう、そして、その敵にはあの城壁が一定の効果があるということになるね」

探索艇を叩き落す未知の力、視覚情報を完全におさえる科学力を持つ一方で、防衛施設として『城壁』が存在するという矛盾。

「あれは歴史的遺物で、今は使われてないんじゃないか？」

「その可能性もあるね。ただ、街並みと城壁と城があまりにしっくりくると思わないかい。なんというか……似合すぎていて」

それはそうだろう。

地球の中世ヨーロッパあるいは創作物の景色なのだから。

しかし、すべてを地球文明の物差しで考えるのは考えものだろう。

「あの力と、この惑星の文明が実は無関係ってことはないですか？」

「科学力が違う二つの文明が共存してるっていうのかい？ 流石に考えがたいかな」

「このままじゃ埒が明かないし、情報を得る必要があるのは間違いないな」

ピピッ

これからの方針が決まったところで大気構成の再チェックが終了の合図が鳴った。

「じゃあ、再チェックも済んだみたいだし、俺は降りるから、ルナは留守番頼む。ライト、もしものときはルナをたのむぜ」

「は、はいなのです……って、なに、しれっとんでもないこと言ってるですか!?!」

「ん？ 探査艇のまま街に近づいたら警戒されるだろうし、仕方ないだろ」

「そういうことじゃないです！ ルナも一緒に降りるのですよ」

「いや、だってお前、接触嫌がってたんじゃない……」

「やると決めたからには、ルナもやるですよ」

「いざというときのために、探査艇に残るのも仕事なんだが」

「シド先輩が残るから問題ないです！」

予想外のルナの反応。

あれ、なんか不味いこと言ったか？

助け舟を期待すべく、ライトの視線を送るとさらに予想外の発言泥舟が待っていた。

「僕も行こう」

「えっ、いや、待て待て。非常事態に備えて、ここに残る人員は必要だろ」

「そういう考えもあるけど、僕としては、相手のほうが圧倒的に優位なことが分かっている状況で、小細工を施すのはかえって危険だと思うな。こちらが全員で交渉することで誠意を見せる……そういうものが通じるとは限らないけどね。もし、彼らの文明が見た目大したこ通りなら、携帯武装プラスターとルナちゃん戦闘職でなんとかなるだろうしね」

「いや、しかし……」

「だいたい相手はこちらの言葉が通じない異星人だよ。ソラはどうやって交渉する気なんだい？」

「それは、まあ、ボディランゲージとかでなんとかするとか……いやまてまて、それはライトがいても同じだろ」

「ふふ、僕は異星人、いや異星人との接触、交渉についてはかなりの知識テンプレを持っているからね」

「なんだかわかんがすごい自信だな。なぜか滅茶苦茶不安になるのだが」

「いついつときのシド先輩は全く信用できないのですよ」

そんなこんなで、俺のまっとうな意見は却下され、3人で交渉に臨むため城を目指すことになったのだった。

探査艇から降りると、肌に心地よい風を感じた。空調によるものではない自然の風。土の匂い、草の匂い、水の匂い、生命を感じさせる濃い匂いに、思わず酔いそうになる。全てが新鮮で、そして懐かしい。体の中の何かが地球の記憶を取り戻していくかのようだった。

「何か飛んでくるのですよ！」

ルナの声に反応して街の方角をみると大きな鳥の群れが飛んでくるのが見えた。

「鳥」、映像資料でみたことはあるが、実際に見るのは初めてだ。もちろん、この惑星の鳥は地球の鳥とは全然違うのだろうが、初めて見る命、生身で飛行可能な生物に俺たちは目を奪われていた。

「思ったより大きいな」

「それにかなり速いのですよ」

鳥(?)の群れはみるみるこちらに近づいてくる。数は10数羽といったところだろうか、そしてその姿はどんどん大きくなっていく。大きくなっていく。大きくなっていく。大きく……なりすぎじゃないか？

「これは鳥っていつより、ひりゅ……」

ライトの発言を遮るように、その巨体に相応しく大きな風を起こしながら、鳥たち（？）が俺たちの前に降り立つ。その大きさは約3メートル、翼を含めればその数倍、そして、その顔には地球の鳥たちとは違い、爬虫類のような顔に牙が生えていた。

「こ、これって本当に、鳥なのですか？」

スタッ

鳥（？）に見とれていた俺たちの前に、1人の少女が降り立つ。鳥（？）の上から飛び降りてきたのだろうが、その軽やかな身のこなしに、まるで女神でも舞い降りたかのような錯覚を感じる。長く美しい黒い髪、黒真珠のような吸い込まれそうな瞳、その黒と対照的な彼女の肌の白さ、純白の鎧、まるで美の女神もかくやという出で立ちである。しかし、俺はその美しさよりも、誰かを髭髯させる彼女の顔立ちが気になっていた。

しかし、その考えが形になる前に、彼女に合わせるかのように、他の鳥（？）の上からも、武装した騎士たちが次々と降りてくる。

「# \$ % & || * + # \$」

少女が俺たちに声をかけてくるが、当然聞き取ることにはできない。しかし、彼女たちが俺たちに用があるのは間違いなさそうだ。兵士たちはその間にも俺たちを包囲するかのよう展開している。

「ふむ、どうやら手厚い歓迎を受けそうな感じだね」

「えっと、俺たちは……」

両手を挙げて敵意がないことを示しつつも、なんとかコミュニケーションを試みようとする。しかし、次の少女の発言はこちらの想像をはるかに超えていた。

「コンニチハ。ワタシノコトバ ワカルマスカ？」

これが、俺たちハカモリと姫異星人の日本語による衝撃的な出会いファーストコンタクト。

困惑する俺の後ろでは、ライトが「なんてテンプレな……」と意味不明な言葉を呟っていた。

でたとこ姫様

「は、はい、わかるデス。いや、ワカルマスデス」

「おいおい、落ち着け。お前^{ルナ}までカタコトになる必要はないからな」

ルナがいい感じに混乱してくれたおかげで、いつものペースを取り戻すことに成功した。

自分より混乱した人間がいると落ち着くことが出来るというのは本当らしい。

先ほどは、鳥(?)と少女に気をとられていたので、あらためて^{騎士}異星人たちを観察してみる。鳥(?) 1羽につき一人の騎士が乗っていたらしく、騎士の数は男女混成で13人。鎧に造詣が深いわけではない俺から見ても、その装備は(少女には及ばないものの)^{高級品}それなりの品に見えるし、しっかりと手入れされている。8人は俺たちを囲むように展開し、残りの5人は少女の傍らにたち、こちらの様子を警戒している。腰に差した剣に手こそかけてないもの、なにかあれば、少女と俺たちの間に割って入るつもりなのだろう。

視線を少女に移してみると、こちらは先ほどとは違った印象を感じさせた。

一見神秘性すら感じさせた少女だが、今は歳相応に見える。歳の頃は、ルナと同じく15歳程度、もしくはもう1、2歳下といったところ。言葉が通じるか不安だったのだろうか、こちらが少女の言葉に反応したことにあからさまにホッとした表情をみせている。しかし、まだその表情は自信なさげで、緊張していることを窺わせる。

「俺の名前はソラ。で、こっちがライト、このちっこいのがルナだ。えーっと、あんた、じゃなかった、えーっと、貴方様のお名前をお

聞かせ願いませんか？」

「敬語がおかしいよ、ソラ」

「そんなこと言ったって、敬語なんて使ったことないんだから仕方ないだろ。見るからにやんごとなき御身分の方にあらせられる方とお話しすることなんか……」

お互いに自己紹介をする流れにもっていきたかっただけなのに、漫才のようになってしまった。これは下手をすると気分を害したのではないだろうか。言葉はわからないはずだが、周りの騎士たちが落ち着かない様子を見せている。

恐る恐る騎士たちのリーダーであろう少女(?)の様子を見ると、意外なことに少々戸惑っているようだった。

「????」

「伝わってないのではないですか？」

少女の話し方からわかるとおり、彼女は「日本語」があまりうまくないらしい。どうしたものかと思っていると、再び少女が口を開いた。

「コトバ ハイ ムズカシイ コトバ ワカラナイ デス」

「ゆっくり、喋ったほうがいってことかな？」

「ハイ デス」

おっと、コミュニケーション成功。

少女も少し嬉しかったらしく、少し表情が柔らかくなった。彼女の言葉を意識すると、早口や難しい言葉は、理解できないということなのだろう。

俺たちは、ゆっくり簡潔な言葉で、自己紹介をやり直すことになった。

こちらが自己紹介しつつ、事情を簡単に説明すると、何度かびつくりした表情を見せたり、首をかしげたりしていたが、最終的にはお互いの情報をいくらか、交換することに成功した。

少女の名前は、サイサリア＝ウルテム＝レブラント。意外というべきか、見た目通りというべきか、俺たちが向かおうとしたお城に住んでいるレブラントこの国の姫様だそうだ。

で、これは見た目どおりなのだが、周りの騎士たちは、この姫さんの護衛らしい。

彼らは俺たち日本語の言葉がわからないらしく、姫さんと俺たちがやり取りするのを、無言でみているだけだった。

簡単なやり取りにもかかわらず、なかなか意思の疎通というやつは難しい。ボディランゲージで云々とかいつてた自分が恥ずかしくなる。

ここまでの話が終わった段階で、すでに1時間の時が流れていた。このまま立ち話を続けるわけにも行かず、姫さんからの提案で、俺たちはお城に『ご招待』されるとい話になった。

「『ご招待』をお断りしたらどうなると思う」

「警備班の『任意同行』を断った場合、どうなるか知ってるかい？」

もちろん、その場合は『強制連行』タイホに切り替わる。

姫さんからは、とくに威圧するようなものを感じはしないが、俺たちを包囲している騎士の数からいって、そのままお帰りください

とはならないだろう。

それでも、彼らの文明レベルが見た目どおりなら、探査艇に撤退
くらいはできる。携帯武装プラスチックはあるし、ルナもいるのだから。戦闘職

だがここで無駄に波風を立てる理由はない。形式上でも自由が認められて
いるほうが動きやすいし、友好的なポーズをとっていて損
ということはない。それに、どちらにしる情報を得なくては話にな
らないのだから。

ガタゴトガタゴト

というわけで、現在、馬車にて城に移動中である。

馬車には俺たち3人の他に、姫さんが乗っている。護衛の騎士も
二人乗り込んでいるし、周りに騎士たちがいるというものの、姫さ
んと同乗という展開は少々意外だった。

もちろん探査艇で移動できればそれが一番手っ取り早いのだが、
当然のことではあるが、認められなかった。お城にあの大きさのも
のを着地する場所が用意できてないというのが表向きの理由。もち
ろん、俺たちを探査艇から引き離し、その間に調査するがが目的で
あるのは間違いない。

となると、当然、姫さんたちが乗ってきた鳥、もとい飛竜に乗る
ことになるかと思ったのだが、姫さんが城を出る前に手を回してい
たらしく、はかったようなタイミングで馬車と、数十人の騎兵隊が
到着したのだ。

この物騒な出迎えに、拘束されるのではと警戒した俺たちだったが、姫さんが真っ先に馬車に乗り込んだため、少々拍子抜けすることとなった。きつと俺たちを警戒させないためなんだろうが、この待遇は意外といえる。

ここまでの姫さんの様子を見る限り、どういふ思惑があるのかわからない。が、少なくとも現状は俺たちを悪く扱つつもりはないとみていいだろう。

ガタゴトガタゴト

「……」
「……」
「……」

揺れる狭い馬車の中、沈黙が訪れてる。

このまま黙っているのも気まずいので、俺は先ほどから気になっていたことを聴いてみることにする。

「どうして俺たちの言葉がわかるんだ？ やっぱり、この惑星ホシの科学力くらいになるとちよつと喋ったくらいで、簡単に相手の言語を解析できる翻訳機とかあったりするの？」

「ホンヤクキ？ ワカラナイ デス」

「わからない？ 翻訳機という概念がないということか？ それとも、違う名前なのか？ えーっと、ごめん。何と言えればいいかな。俺たちの言葉がわかる 道具 ある？」

「ドウグ ナイ デス。 デモ ホン アル デス。 ベンキョウ シタ デス」

「本、というと、魔道書みたいなものだったりするのかな。テンプレでは魔法は必須だし」

「シド先輩、こんなときにふざけないでほしいのです。魔法とかあ

るわけないのですよ」

「ルナちゃんも夢がないなあ。言葉が通じる魔法とか、あつたらすぐく便利だと思っただけど」

「ソナ マホウハ ナイ デス」

「ほら、魔法はないっていつているのですよ」

ん、なんか表現がおかしくないか？その言い方だとまるで……

「もしかして、魔法があつたりするの？」

「ホシミ先輩まで、何言ってるんですか」

「マホウ アル？ ワカラナイ デス」

やっぱり、気のせいかな。まあ、魔法なんて存在するはずがないよな。

俺も、ライトに毒されてきてるんじゃない……

しかし、姫さんの言葉はまだ終わってなかった。

「マホウ ツカウ デキマス」

でたとこ姫様（後書き）

カタカナは読みにくいですが、近いうちの解消する予定です。

シスター姫様（前書き）

ストーリーは決まっているのに、筆が進みません。文章が固すぎのような気がして仕方ない。

シスター姫様

「おいおい、マジかよ」

「ま、魔法が使える……のですか？」

「いや、そんなに驚くことではないのではないかな」

「いやいや、驚くдар、普通に。しかし、ツツコミをいれる前にライトの暴走がはじまる。」

「ファンタジーといえば魔法だと思う。むしろ、魔法がなければファンタジーじゃないというべきかもしれないね。いや、騎乗して飛ぶことが出来る竜種がいるんだから、魔法は存在すると仮定すべきだったんだよ。隕石や、探査矛盾の問題もこれでつじつまが合うわけだし、僕としたことが全く迂闊だったと言わざるを得ない。科学などのつまらない既成の概念に囚われてしまうなんて、まだまだ僕も修行が足りなかったってことだね。いや、そんなことより、これからの方針だ。ここで問題になるのは僕たちにも魔法を使うことが出来るかってことだね。異世界召喚のケースにおいては、被召喚者は大抵魔法が使える、というより、むしろ、強大な魔力を持つというのがテンプレなわけだけど、今回はそのケースに当てはまるかどうかは非常に難しい。なぜなら、僕たちはこの惑星^{ホッ}にとって異星人であって、異世界人ではないからね。むしろ、テンプレ的には全く魔力がない、もしくは魔力はあるが使用することが出来ないという展開も十分に考えられるわけだ。その場合、魔力がないこと自体がステータス、つまり、主人公たちの特殊性を表し、その場合は……」

暴走というより、病気なんだが、時と場合を考えてほしいものである。ほら、姫さんと騎士がこちらを見る目が痛い痛い。姫さんは

ともかく、騎士に至ってはライトが何を喋っているか分からないはずだが、その雰囲気の異常さは隠しきれない。仕方なく、ライトの隣に座るルナに視線を送る。

「その文化に根付く魔法という存在が、どのような役割を果たしてきたかは興味ぶか（グフツ）」

整った顔立ちに似合わない非常に残念な声をあげ、ライトが沈黙した。ルナの肘がライトの鳩尾に食い込んだのだ。これさえなければ、頼りになる奴なんだけども。

「……………」

「……………」

「ところで、さっき言っていた魔法の事なんだが……………」

「* \$ ¥ …… ハ、ハイ」

うん、我ながら、不自然な話題転換だよ思う。

沈黙が馬車内を支配するのを避けるには、こうするしかなかったとはいえ、もう少しフォローすべきだったかもしれない。まあ、実際興味があるのは間違いないので、あらためて、魔法について聞いてみる。

で、まあいろいろ聞いてみたわけだが……………姫さんの拙い日本語とお互いの文化の違いの差は意外と大きく、要領を得ない話になってしまった。

一応、【この惑星^{ホッ}には、『魔法』が存在する】ということの間違いないらしい。ただ、姫さんのこの惑星^{ホッ}の『魔法』が、俺たちの認識している『魔法』と同じものであるかまではわからない。まあ、俺たちの認識する魔法なんてものは、単に不思議な力的な意味でし

かないわけで、厳密な定義があるわけではない。

百聞は一見にしかず、『魔法』というものを見せてもらえばいいわけだが、姫さんはあまり魔法が得意ではないとのこと、馬車の中で使うのは難しいとのことだった。もちろん、街に近いこんな場所、姫さんが馬車から下りて魔法を使うというのは無理だろう。結局、後日、魔法の得意な者にいろいろ見せてもらえるよう取り計らってもらおう約束をして、その話はいったん終わりになった。

そうこうしているうちに、馬車は街の門をぬけ、街中へとかかる。急に外が騒がしくなったので、活気がある街なんだろうと思ったが、この騒がしさはその限度を超えている。何気なく馬車の窓を覗くと、予想外の光景が広がっていた。

予想外といっても、また視覚情報が切り替わるとか、魔女が箒に乗ってとんでいるとかいうことはなく、至って普通。街中の様子は、概ね上空から見た印象通りで、石畳、レンガ造りの家等、そのまんま中世ヨーロッパの街並みである。いや、中世の街は意外と汚れていたという話だから、ごみごみとした生活観はあるもの、それなりの清潔さを誇るこの街並みはやはりファンタジーなのかもしれない。門から城への道は一直線、すなわち、今通っている道はこの街の大通りらしく、かなりの道幅を誇っている、誇っているのだが……

人、人、人、人、人

見渡す限りの人、老若男女の人盛り。広い大通りが、人で埋め尽くされている。

もちろん、王家の紋章がついているこの馬車（+騎士団）を遮るよ
うな者はいないが、そのわずかな隙間を除けば、この街の住人す
べてがこの通りに集まっているのではないかと疑ってしまうほど混
雑ぶりだ。今日は、お祭りかなんかイベントでもあったのか？

「*@+#」

「*@+#」

口々に馬車うまぐるまにむかつて、声をあげている。もちろん何と言ってい
るかまではわからないが、敵意は感じない、というよりむしろ、好
意的なのではないだろうか。ただ、人数が人数だけにちよつと怖い。
姫さんが国民に愛されている……ってというのはちよつと無理がある
か。

説明を求めるべく、姫さんに視線を向ける。

「何かあったのか？」

「ミナサンガ オリテキマシタ」

『おりてきた』？ ああ、『降りてきた』か。ようするに、探査艇
のことを言っているらしい。まあ、正確には降りてきたというより、
『不時着ふじちやく』というべきだが。そんなことより、気になることが別に
ある。この騒ぎの原因は、俺たちなのか？

「この騒ぎは、俺たちに関係あるのか？」

「ミナサンヨ カンゲイ シテイル デス」

「歓迎？」

「ルナたちをですか？ ルナたちは何もしてないのですよ？」

そう、俺たちが、歓迎される心当たりは全くないんだよな。そも
そも、事故（？）で不時着ふじちやくしたのは偶然だ。いくらなんでも、歓迎

するために隕石をぶち当てたわけではあるまいし。となると、普通に考えて、この歓迎は何か勘違いされている可能性が非常に高い。憎まれたり攻撃されるよりはよっぽどまだが、居心地が悪いことは確かだ。このまま勘違いされて、後で誤解が解けたらきまずいだろう。

「もしかして、俺たちって誰かと間違われてるんじゃないか？」

「あ！ 他の国からの使節とかと間違われてるかもなのです」

ああ、その可能性はあるなあ。王族である姫さんが迎えに来るくらい、大事な相手と勘違いされているって感じで。それなら、まずいなあ。

「いや、僕は異世界説を採用したいなあ」

「あ、ライト、復活したのか」

「いや、あまり騒がしいから目が覚めちゃってね」

「城についても寝てたらどうしようかと思ってたから、ちょうど良かったよ。で、異世界説って何だ？」

「ああ、つまり、ここは異星ではなく、異世界ということだよ。都合主義的に、日本語が喋れるお姫様がいるなんて、とてもSF的展開とはいえない。つまり……僕たちは彼女に召喚されたんだよ」「なんだってー!!」

「二人とも寝ぼけているようなら、ルナが目を覚まさせてあげるのですよ」

いや、起きてるよ、うん。ルナが怖いので話を戻す。

「いや、完全にふざけているってわけじゃないんだよ。上空での出来事は科学的には説明できないからね。むしろ、彼女に召喚された^{お姫様}と考えた方が納得いくしね」

「俺たちなんか呼んで、どうするんだよ」

「それは、やっぱりテンプレ的には、魔王と戦ったりとか」

「魔王つて、なんなのですか。ルナは戦うのは苦手なですよ」

ルナが戦うのが苦手ねえ。まあそういうことにしておこうか。

「というか、確かめてみようぜ。えーっと、姫さん」

「ハ、ハイ」

「俺たちのこと召喚した？」

「イ、イエ トンデモナイコトデス」

「じゃあ、ルナたちを誰かと勘違いしているのではないですか？」

「ソナナコトハ アリマセン」

なんか変な感じだ。俺たちの顔をチラチラみていたようだが、俯いてしまう。なんか、お姫様というと、もう少し偉そうなイメージがあっただけだ。

そんなことを考えているうちにも、馬車はだんだんと城に近付いていく。街の門周辺はとくに人が多かつたらしく、城に近づくにつれて、少しずつ人が減ってきて、なんとか周りの景色を眺める余裕が出てきた。街を眺めながら今後のことを考える。

馬車が走っている時点で当然といえば当然なのだが、自動車のような科学を感じさせるようなものは街中に見受けられない。この分だと、見た目どおりの科学力だと考えた方がよさそうだ。となると、探査艇の修理はもちろん、通信機の修理も難しいかもしれない。魔法が通信機の代替になるような便利なものであるか、調べてみた方が良さそう。

姫さんのおかげで、調査は思ったより順調に進んでいる。ただ、こ

のままでは情報源が姫さんに固定されてしまうので、姫さんより日本語が堪能な人がいれば、紹介してもらいたいところだ。滞在が長引くようなら、この国の言葉を覚える必要もあるだろうし。

そこまで考えたところで、馬車がとまる。

城に着いたのか？ と外を見てみると、馬車は城門を抜けたあたりで停まっていた。

「%\$#\$*」

俺たちが馬車から降りていると、お城のほうから白い塊が近付いてくるのが見えた。

よく見ると、それは少女だった。白いお姫様のようなドレスに身を包み、ふたつに縛った黒い髪、近付くにつれて見えてきたその顔は姫さんを少し幼くした感じで……って、どう考えても、この少女も姫なんだろう。そりやお姫様のようなドレスを着てるはずである。ただ、その行動は姫さまのイメージとはちよつと違う。息を切らせながら駆けてくる様子は、子犬を連想させる。いや、姫様の前にお転婆とつけければイメージどおりか。

あつ、というまに、馬車までたどり着いた彼女に、姫さんが話しかける。というより、これはお転婆な行動にお小言を言っているのか。言葉はわからないが、そんな感じ。当たらずとも遠からずだろう。姫さんは、叱っているものの、その表情には「仕方ないなあ」といった感じの愛情が感じられるし、叱られてる少女もそれを知っ

てかしらずかソワソワしている。どうやら俺たちが気になっているようだ。

そんな様子に姫さんも諦めたのか、少女へのお説教はすぐに終わった。待ってましたとばかりに、俺たちの前にトテトテと歩いてくる小さなお姫様。あれ、そういえば、姫さんの時にも思ったが、この少女、どこかで見たような？黒髪黒目は八カモリと同じだから、そう感じるだけなのだろうか。

そんな思考は今回もあっさり中断を余儀なくされる。それはドレスの端をつまんで、優雅にお辞儀する少女の一言によって……

「はじめまして 天使様」

小さなお姫様は、流暢な日本語で挨拶した。

シスター姫様（後書き）

評価、感想をいただけると喜びます。

Angel meets

「どういうことだと思っつ？」

「あの街の様子のことかい？ お祭り騒ぎ それとも 『僕たちの呼び名 天使様』 っつやつのことかな？」

「両方だよ。両方」

「まあ無関係……と考えるのは無理だねえ」

「ここは城の一室。

部屋の中には3人。

俺たちは、侍女さんが持ってきた紅茶（？）を飲みながら、今までの得た情報を整理していた。

城門での一件の後、すぐに姫さんと別れ、今度は小さい姫さんに案内されて、俺たち3人はこの部屋へと連れてこられた。そして、小さい姫さんの方も、侍女さんにお茶を運ばせるとすぐに退室してしまったのだ。

小さな姫さん曰く

「お疲れでしょうからしばらくお休みください」
とのことだったが、向こうもいろいろ準備があるのだろう。

「それにしても、広い部屋なのです」

「これがこの惑星ホシの一般的な部屋というわけではないだろうね」

この部屋は多分城に賓客を迎えた時に使われる客室か何かなのだらう。

カモリ 一言で表現すればとにかく広い。方舟の外の暮らしを知らない俺たちの基準でいえば異常な広さといえる。（省スペースが強制され

る宇宙空間だから仕方ないとはいえ、方舟の個室は恐ろしく狭い)

「調度品も立派なのですよ」

ルナは立派だというのが、実際のところ俺たちに家具の良し悪しはわからない。

部屋の真ん中にドンと居座るテーブルと椅子は確かに高級感がある。しかし、木製の家具など昔話歴史映像に出てくるだけで実際に見るのはもちろん初めてだ。

床に敷かれた絨毯。糸が細かい方が高級だとか聞いたことはあるが、手織なのか機械織なのかさえもわからない。せいぜいわかるのは埃1つ落ちてないことくらいか。

ただ部屋全体に漂う品の良さがあるのは確かで、おとぎ話の部屋のように。ベッドに天蓋がついていれば、お姫様の部屋に見えるかもしれない。

「でも、電化製品みたいなのはないな」

「魔法の品みたいなのもなさそうだよ」

「ちよつと部屋の中を調べてみるのですよ」

情報収集という意味を除いても、この部屋は興味深い。ルナの意見に従い、各々部屋の中で目に付いたものを調べていく。

俺が、この部屋で目に付けたものは3つ。

1つめは、テーブルの上にある燭台。燭台が存在するということは、電気や魔法の灯りはないのかもしれない。

2つ目は、同じくテーブルの上にあるベル。手で振って鳴らすタイプだ。小さな姫さんが「用事がありましたら、これでお知らせください」といつていたので、ベルを鳴らしたら侍女さんでも来てるのかもしれないが、言葉が通じない侍女さんに来てもらっても

仕方がないので、今は用無しだ。

3つ目は、壁際にある大きな柱時計(？)。方舟で使われていた、いわゆる地球規格の時計とは若干違うが、多分時計で間違いないはずだ。盤面の数字は読めないが、大きな目盛りが6つあり、その中がさらに10個に分かれている。地球と同じで時間に関しては60進法が採用されているのだろう。時計の仕様がわからないので、一番細かい針が1周する時間を計ってみると地球換算で58秒強。体感的な誤差はそんなにない。とりあえず携帯端末に登録して後でこの惑星の時計を作れるようにしておく。

「2人とも、こっちにきてくれないかい」

「なんか面白いものでもあったのか？」

「別に面白くはないんだけどね」

バルコニーのほうを調べていたライトが、俺たちを呼ぶ。

部屋に負けず劣らず、バルコニーも立派なもので、これだけでも俺の部屋がいくつかははいるだろう。しかし、それよりも目を惹いたのは下に広がる庭園だった。

「わぁー！　すごい庭園なのです」

ルナが感嘆の声を上げるのも無理がない。

それは庭園の美しさもあるが、一番大きな理由は俺たちが宇宙暮ら^{モリ}しだからだ。

そもそも方舟には庭園と呼べるものはない。メンタルケア用のリラクスルームや、テラフォーミング用生態保存ルームに、いくらかの植物があるだけである。このような形に手入れされた庭園をみるのは、生まれて初めてなのだ。

しかし、俺には庭園そのものより気になるものがあった。

「気付いたかい？」

「ああ」

庭園の中には、ちらほら兵士の影が見られる。

城の中なのだから兵士がいるのはおかしくないのだが、問題はその数だ。みえるだけで20人はいるだろうか。

この部屋は、城の内側に面している3階の隅にある。すなわち、この庭園は城の中庭にあたる。

ということ、この兵士が警戒しているのは、城の外部に対してではなく内部に対してということになる。はっきりいって、対象は俺たちで間違いないだろう。

「ルナ、部屋の外に人の気配はあるか？」

「えーっと、扉の前に2人。隣の部屋に、ひー、ふー、みい………6人いるのです」

ルナがなんでもないように答える。

これは科学でも魔法でもなく、ルナの特技の一つだ。戦闘職

「これって『軟禁されてる』っていわないか？」

「明確に敵対するわけではないけど、信用されてるわけではないってことだろうね」

さて、部屋から無理矢理出ようとしたら、どうなるか？

まあ楽しいことにはならないだろうから、流石に試そうとは思わない。

この兵士の配置が、誰の指示かはわからないが、皆さんたちは見た目と違い、意外と強かなのかもしれない。

そんなことを考えながら、俺たちは今後の方針を話し合うのだっ

た。

1時間後（正確には柱時計が1周したころ）、小さい姫さんが部屋にやってきた。（扉が開いたとき、ルナが言っていたように兵士が二人立っていることが確認できた）

意外なことに護衛の騎士などはおらず、部屋に入ってきたのは小さい姫さんとお付きの侍女さんだけだった。

6人掛けのテーブルの窓側の3つの席に俺たちが座り、小さな姫さんは扉側の中央の席に座る。

侍女さんが、新しいお茶を持ってきてすぐに退室したので、部屋の中には4人。

ほぼ見ず知らずの俺たち相手に1対3という状況。狙ってやっているなら大したものである。

「あらためましてご挨拶させていただきます。私はミモレーゼ^{ミモレーゼ}ウルム^{ウルム}レブランド、レブランドの第2王女です。ミモリとお呼びくださいませ」

流暢な、しかし少々堅苦しい日本語で挨拶する小さい姫さん、もといミモリちゃん。門のところでも挨拶はしていたのだが、俺たちも挨拶を返すことにする。

「俺はホシミ^{ホシミ}ソラ。ソラと呼んでくれ」

「シド^{シド}ライト申します。お姫様にはライト^{ライト}と呼んで頂きたい」

「ハクト^{ハクト}ルナなのです。ルナのごことはルナでいいのですよ」

俺たちは相変わらずの挨拶。

ミモリちゃんは日本語が堪能なのだから、敬語の意味はわかるはずだ。しかし今回はあえて普通に話すことにした。

「ソラ様、ライト様、ルナ様ですね。お会いできて光栄です」

俺たちの挨拶を気に留める様子もなく言葉を続けるミモリちゃん。俺たちを立てる姿勢らしい。

「光栄っていわれるほどのことをした覚えはないんだけどな。とりあえず、『様』っていうのは勘弁してくれ。普通にソラでいいよ」「もつたいないお言葉、身に余る光栄ですが、レブラント王族の一員たる私が天使様を呼び捨てにするわけにはいきません」

「天使様が……」

彼女の言う『天使様』というのが、現在の俺たちの微妙な立場を指していることは間違いない。

ここで、俺たちが天使ではないと否定するのは簡単だ。だが、その場合状況は好転するだろうか？

天使様と言われながらも、警戒されているこの状況から考えて、むしろ悪化する可能性が高い。

そう分析した俺たちは先ほどの話し合いで、とりあえず天使という言葉を否定しないことに決めていた。敬語を使わない理由はこれだ。

「ミモリちゃんは固いなあ。もう少し、崩してくれてもいいんだけど……あ！『ミモリちゃん』って呼んでいいか？」

「『ちゃん』ですか……あ、あの、それはちょっと恥ずかしいかもです」

『ちゃん』付けで呼ばれたのが恥ずかしかったのか、すこし照れた表情をみせるミモリちゃん。

この部屋に入ってから落ち着いた態度をとっていたが、こういう年齢相応の表情のほうが可愛らしい。先ほどの門での様子からすれば、これが彼女の素なのかもしれない。

「こつみえても、私も準成人なので……できれば『ミモリ』とお呼びいただけないでしょうか」

『ミモリちゃん』のほうが、似合ってるんだけどな。まあ仕方ない。

それにしてもじゅんせいじん？聞きなれない言葉だが……準成人？

ああ、成人に近いってことか。

「あれ？ ミモリちゃ、じゃなかった、ミモリって歳いくつなんだ？」

「女性に歳を聞くのは失礼なのですよ」

地球の常識で注意してくるルナ。俺的にも、女性に年齢を聞くのは失礼だと思うが、女の子の聞くのは問題ないと思う。ミモリは見た目10歳くらいにしかみえないが、「こつみえても」と言ったかには、幼く見えるタイプなのかもしれない。準成人という言葉の意味を考えると、(日本でも15歳くらいで元服してたことを考慮すれば)12、3歳という可能性はある。

「先月、18歳になりました」

「「「じゅんはちいいー」「」」

3人の声が重なる。

俺たちの態度に「やっぱりみえませんか？」と悲しそうな表情をみせるミモリ。そんな悲しそうな顔をされると……いや、明らかにおかしいだろう。幼く見えるとか、童顔とかそういうレベルを超えている。

「俺と同じ歳なのか……」

「えっ！ ソラ様ってそんなにお若いのですか！」

今度はミモリが驚く。

俺ってそんなに老けて見えるのだろうか。それはミモリの年齢以上にシヨックなのだが。

「プリンセスには、僕たちはどのくらいの歳にみえるのかな？」

「えっと、ソラ様が25、ライト様はもう少し上だと思います。ルナ様は成人²⁰されてないと思います」

「ちなみに姫さんはいくつなんだ？」

「姫さん?? あ！ サリア姉様のことですね。21だったと思います」

俺とライトは18、ルナは15と、俺たちの年齢を告げるとミモリは「天使様は私たちと随分違うのですね」と驚いていた。俺たちもこのとき、ここが異星なんだと再認識していたわけだが、真相はただの勘違いだった。

この惑星^{ホツ}の1年は242日。地球の365日換算で計算している俺たちと比べて歳をとるスピードが約1.5倍になっているだけなのである。だから地球換算だとミモリは12、姫さんは14となり、見た目の印象とそんなに変わらない。ただ、それに俺たちが気付くのはもう少し後の話であった。

なりゆきではじまった年齢の話だが、少し打ち解けた雰囲気になったのは収穫だった。

それ以外にも収穫があった。俺が「姫さん」と呼んだことをすぐに「サリア姉様」に直していたことだ。この1時間の間、多少なりとも彼女たちで話し合いがもたれたことを意味している。もしかすると探査艇の調査も済んでいるのかもしれない。

こうなるとミモリの今の俺たちへの態度の意図が気になるところだ。俺たちが異星人ということを知った彼女が理解しているのだろうか？ 姫さんにはそれなりに、事情を話したつもりだが、その話を聞いたはずのミモリはまだ俺たちを天使様と誤解しているのだろうか？ それとも、姫さんには俺たちの言っていることが良く理解できていなかったのだろうか？

「姫さんは、俺たちのことを知ってたみたいだけど、ミモリはどのくらい知ってるの？」

「天使様のことですか？ 聖書は一通り読みましたので、姉よりは詳しいと思います」

今度は「聖書」ときたか。
八カモリは基本無宗教だからというわけではないが、宗教はどうも胡散臭い。

「じゃあ、俺たちがここに来た理由はわかる？」

もちろん、不時着しただけなのだから理由などあるわけない。

あえていうなら、隕石が理由なわけだ。
それをミモリがどう認識しているか、あえて焦点をぼかして聞いてみる。

「救済……ではないのですか？」

俺たちに確かめるように呟く。

『救済』が何を指すのかはわからない。

しかし、そう呟くその表情には『恐れ』がみえる。

そもそも救済ってなんだ？ まさか本当に魔王が復活したとか
言わないだろうな。

しかし、ミモリの答えは俺たちの予想をさらに超えた。

「まさか……この国を滅ぼしに来られたわけでは……ないですよ
ね？」

いつの間にか、俺たちは天使ではなく魔王になってしまった。

Angel meets (後書き)

設定覚書

1日は60秒×60分×24時間。

この星の60秒は地球換算で約58秒。1日の長さは29/30日。

時間は6進法表示 0 } 5 10 } 15、20 } 25、30 } 35

と表す。(午前10時は14時)

1年は12ヶ月で、1ヶ月は20日(21日の月が2回)

1週間は5日(火金木土水) 21日は週からはずれて無の日(安息

日)となるため、必ず月の初め(1日)は火曜日から始まる。

天使の笑み

「滅ぼしに来られたって!? ルナたちは滅ぼさないですよ! そもそも滅ぼしたりできないですよ!」

「救済か滅ぼすか……僕たちは随分と極端な天使なんだね」

「天使様?」

大慌てで正直に話してしまうルナと、まるで他人事たんにのように言うライト。

その反応に、ミモリは顔に疑問符を浮かべている。

いや待て、お前ら! 一応俺たちが天使(という設定)なんだよ。バラしてどうする!?

まあ妙な誤解は解いておく必要があるのは確かだが。

「とりあえずこれだけは言うておくが、滅ぼしに来たわけではないからな」

「いえ、申し訳ございません。決して天使様がそのようなことをされないのはわかっております」

ライトたちの発言をどう捉えたのかはわからないが、何事もなかったように謝罪するミモリ。俺たちの言動はかなり問題があると思うのだが、ミモリの中の天使観はどうなっているのだろうか?

「そもそもその滅ぼすとか救うだかいう話はどこから出てきたんだ? 『聖書』とやらにでも書いているのか?」

「天使様はご存じないのですか?」

怪訝な顔をするミモリに、不味い質問をしてしまったことに気づ

く。
『天使様』とやらがモノを知らないというの世間慣れしてないという意味ではおかしくないと思うが、それにも限度というものがある。この問いに対して、正直に「何もわからない」と答えていいものかと、悩む。

「地上のことには疎くてな。いろいろ教えてくれると助かるよ」

ちょっと苦しい理由だが、こつ答えるほかない。

ミモリの反応が気になるが……

「はい、わかりました。では少々お待ちを」

そういつて、ハンドベルを鳴らすミモリの表情からは、何も読み取ることができなかった。

「これが世界の歴史を記した本です」

そういつてミモリが差し出したのは一冊の本だ。先ほどミモリが侍女さんに命じて持ってきてもらったものだ。装丁は立派だが紙の質は『多分』そんなに良いものではない。製紙技術の問題だろうか。『多分』とつけたのは、俺たちにとって紙はそんなに馴染みのあるものではないためだ。地球人が情報伝達に紙という媒体を使わなくなって久しい。

タイトルは……もちろん読めない。この惑星の文字で書かれているのだから当たり前だ。読めない本を受け取っても仕方がないので、ミモリに読んでもらうことにする。

「天使様の名前が初めて歴史に出てくるのはこのあたり。約500年前の記述です」

ミモリがパラパラとめくっていた手を止める。

『天空より天人てんじんの船をかりきたる驅り来る』

一文をなぞりながら、ミモリが日本語に直して読みあげる。

「この『天人』というのが天使様のことです。銀の船に乗った天使様が天空から下りてこられたと、書いてあります」

「銀の船ってどんなものなのですか？ 探査艇のことなのですか？」

「天空を駆ける船だそうです。先ほど街の上を飛んでいた天使様の『タンサテイ』に似ていたと思います」

「もしかして、ミモリはみたことがあるのか？」

「はい。聖都にいったときに拝見させていただく機会がありました。500年前のものなので実際に動くかどうかはわかりませんが」

「それは、一度僕たちも見てみたいね」

これはいい情報だ。銀の船が探査艇だとすれば、この惑星ホシの状況は俺たちより前に出発した方舟シンケルナンバーが関係しているということになる。

それなら探査艇の修理に協力してもらうことが出来るかもしれない。しかし、500年前というのはどういう意味だろう。出発年や航路を考慮したとしても、そんなに早く地球からこの惑星に着くことはないはずなのだが。

とにかく一度、聖都とやらに行ってみる必要はありそうだ。とりあえず、この話しは後で詳しく聞いてみることにする。

『銀の衣を纏い漆黒の髪と瞳をもつ。その姿我らとかわらず』

「天使様は銀色の服を着ていらして、髪と瞳の色は黒。今の天使様と同じ姿恰好をしていたそうです。当時は黒目黒髪の間人は全くい

なかったそうですが、それ以外は全く人間とかわらなかつたと、書いてあります」

俺たちが着ているハカモリの制服は確かに銀色だ。街の様子を見る限り、銀色の服を着ているものはいなかつたが……

「今は黒髪黒目は珍しくないのか？ ミモリや姫サリアさんの瞳めも髪も黒だけ」

「いえ、数自体は多くないと思います。市井にも黒髪の者はいますが、王室の遠縁にあたる者だといわれています。レブラント王室は、ルナ天使様の血を受け継いでいますので」

「ふえ？」

突然自分の名前が出てきたことに驚いたルナが奇妙な声をあげる。

「ルナ様っていうのは誰なんだ？」

「あ、ルナ様というのは500年前の天人、つまり私たちのご先祖様のことです。そこにおられるルナ様とは違うと思います」

「『思います』？」

「いえ、最初に御姿ルナ様を見たときから思っていたのですが、肖像画ルナ様に似ているのです。なにか縁ゆかりのある方なのではと」

全員3人の視線がルナに集中あつまする。

「なんなのですかなんなのですか？ ルナに子孫というか子どもなんてまだ早いのです」

「ルナ子どもが子どもとか、ははっ、確かに早いな」

「早くなんかないのです！ 子ども扱いはやめるのですよ」

「どっちなんだよ」

「確かにルナちゃんとミモリプリンセス姫サリアってなんか似てるよね」

ライトの言葉に、あらためて二人の顔を見てみると、確かにちょっと似ているかもしれない。初めて会ったとき、姫さんサリアやミモリに感じた既視感の正体は、これだったのだろう。

プリンセス
「ミモリ姫と僕たちと言葉が通じるのは、『ルナ様』のおかげなんだろうね」

俺たちの言葉
「確かにミモリは日本語上手いよな」
「有難うございます。天使様に通じているようで安心しました」

しかし、騎士たちには日本語が通じていないようだったし、日本語が喋れる者は少ないのだろう。

「この国で普通に使う言葉ではないってことだよな。日本語を話す国とかあったりするの？」
俺たちの言葉

公用語とし
「いえ、この大陸の国は大陸共通語を使います。聖都の教会関係者でも天界語を話せる方は少ないです。高位の方でないと習うことはできないと聞いておりますし」

「ミモリは誰に習ったのですか？」
レフランド
「お父様と聖都の教会の方です。私たち王室には、天界語の習得が求められますので」

誰も使わないのに習うことを制限されている言語。それなのに王族には言語習得が求められるというのは一体どういうことだろう？

「誰も喋れない言語を習っても役に立たないだろう？」

「いえ、本日役に立ちました」

僕たちの言葉
「それにしても、プリンセス・サリアは日本語があまり堪能ではなかったようだけど」

俺には日本語を勉強してなかったサリア姫さんの気持ちがよくわかる。ミモリが使いもしない言語を真面目に勉強したことのほうがおかしいくらいだ。

「姉は、座学より実務の方が好きなお方ですので、こういうことは苦手なのです。なにか失礼がありましたでしょうか？」

「いや、そんなことはないのです。でもミモリさんが最初から来てくれたほうが良かったかもです」

「それは……姉が『どうしても自分が行く』といわれましたので、なんか複雑な表情で説明するミリア。ふと、サリア姫さんの自信なさげな顔が思い出される。

今思えば、サリア姫さんは妹のように日本語を上手に喋れないことに少なからずコンプレックスを持っていたような気がする。彼女が望んで俺たちに会いに来たとは考えがたい。

ということとは、別の理由があるのだろう。

「それは嘘だろ」

「嘘ではありませんよ」

軽くカマをかけてみるつもりだったが、ミモリは何事もなかったように返す。

この少女、見た目と丁寧な口調に惑わされがちだが、なかなか強かなのだ。

「でもすべて話しているわけではない」

「はい。でもそれは」

ミモリはにこりと笑って言葉を続ける。

「天使様も同じですよね」

天使の笑み（後書き）

次回はミモリ本領発揮。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6905x/>

八カモリと方舟と魔法のホシ（22番目の八カモリの唄 改題）

2011年11月26日00時55分発行